

通俗語源説と「鬨伽」の問題点

中 島 利 夫*

Some Remarks on the Folk-etymology in Reference to the Origin of the Japanese Buddhistic Loan Word, Aka

Toshio NAKAJIMA

(1976年9月13日受理)

(1)

通俗語源説または語源俗解とは史的根拠のない非科学的なしろうと語源説のことをいう。例えば、床屋談義の一つにあるバリバリ刈るからバリカンだといった類いである。その実バリカンは明治もかなり早い年代に初めてフランスから輸入せられ、その製作所の名前 *Bariquant et Marre* の前半分をとってその名称としたのがそもそもの始まりであった¹⁾。その後日本でも大阪をはじめ各地で製造され、電動式になった今日でもなお電気バリカンの名で呼ばれている。慣れと呼び易さの故であろう。

今アメリカで流行をみている *cheeseburger*, *chickenburger*, *shrimpburger* 等は *hamburger* (*Hamburg* に由来するステーキ) の *ham* を語源俗解流に類推した結果、*ham* に代えるにそれぞれ *cheese*, *chicken*, *shrimp* 等を以てしたものである²⁾。

又時代はさかのぼるが、中世英語 *berfray* は古期フランス語 *berfrei*, *berfroi* (望楼) からの借用語である³⁾。後に教会の鐘への類推から *belfry* (鐘楼) と誤綴されるようになり、それが民衆心理に支えられて普及した結果、そもそもの誤綴が正統語として現代英語に引き継がれたものである。つまり *ber-* が *bel-* と誤綴され一般に普及した過程に通俗語源による類推作用の支えを認めるものである。

また大豆の意味の中世英語は単数 *pese*, 複数 *pesen* であって、それぞれ *peas*, *peasen* の形で17世紀までつづいたが、その後 *peas* の *s* が複数の *s* と思えられ、以後単数形は *s* を除いた *pea* となり、従来の複数形 *peasen* は廃語となった。いわゆる逆成語 (*Back-formation*) の現象である⁴⁾。この種の逆成語の形成をみる過程にも通俗語源の形跡を認めるものである。

また国語における、曰く何々の略、何々の転とする類型的語源説の中に到底納得しかねる通俗語源の例が極めて多い。

例を「ねこ」ととると、小学館日本国語大辞典は、諸家の語源説を列記紹介する欄で、新井白石の「東雅」から引用して、《ネコマの略。ネは鼠の義。コマはカミ(神)の転。(東雅)》と要約しているが、《コマはカミ(神)の転。》などと新井白石全集第四巻所載の「東雅」には書いていない。問題の箇所は《コマといひクマといふは転語也。鼠の畏るゝ所なるをいひし也。今俗にネコといふは其語の省ける也。》となっている。白石の「ねこ」

* 外国語研究室

についての語源説は上に引いた原文を以って補正することによってほぼ推察することはできる。こうした何々の略とか何々の転とか独断的にきめこむ語源解こそ筆者の言わんとする通俗語源説の好例といえよう。因みに「ねこ」の新しい語源説に、擬声語ネに接尾語コの附したるものというのがある⁵⁾。参考すべき明解と思われる。

(2)

《清げなる童など、あまた出でて、關伽たてまつり、花折りなどするも、あらはに見ゆ。》(振り仮名省略)

源氏物語、若紫 岩波文庫本

玉上琢弥源氏物語評釈によると、《小綺麗な女の童などが、大勢出て来て、仏前に水を供えたり、花を折ったりするのも、すっかり見通せる。》云々と口訳されており、さらに關伽については、《仏に供える水、梵語 argha.》と簡注もあるが、まさしくその通りである。

有名な Arthur Waley の The Tale of Genji では同じ箇所を、

“Just then a party of nicely dressed children came out of the house and began to pluck such flowers as are used for the decoration of altars and holy images.”

Chapter V, Murasaki

と英訳され、肝心の仏に供える水、關伽のことは全然無視閑却せられている。

R. H. Blyth ほか多数校・編の Japanese-English Buddhist Dictionary によれば、

“關伽 argha, arghya. Something valuable, an offering to the Buddha. Hence, I. a utensil used for offerings, II. offered water.” と最も簡にして要をつくした明解を掲げている。

梵語学の権威、荻原雲来は遺著梵和大辞典において arghya を貴重なる、価値ある；客に呈する水、(中略)關伽水と訳し、argha の項下には、《此の語はしばしば arghya と混用せられている。》と附注している。おもうに關伽の原語としては、argha を關伽水の原語としては、arghya をとるべきものと考ええる。

これを要するに、關伽における水とは仏に供える功德水⁶⁾のことであって、日常生活用の水のことではないのである。

梵語で水を意味する本来のことばは、uda ; udaka である。(但し前者は合成語の語頭乃至語末に限り使われる形である。) 現代ヨーロッパ諸言語のうち、例えば英語の water、ドイツ語の Wasser、オランダ語の water 等のゲルマン語派系のことばは、いずれも上記の梵語 uda を経てインド・ゲルマン(印欧)語族共通の祖語 *ud- にさかのぼる訳である。一方フランス語 eau、イタリー語 acqua、スペイン語 agua 等の如く俗ラテン語を共通の母語とするロマンス系諸言語にありては、ひとしくラテン語 aqua(水)にさかのぼる。梵語 argha(關伽)とは偶然似通った語形をしてはいるが、両者は全く関係のない他人の空似である。この意味において楳垣実編増補外来語辞典が、アカの項下で、《(前略)梵語では「供養」の意だからラテン語 aqua とは無関係。(下略)》と附注を加えているのは、学問的態度である。

山中襄太著地名語源辞典はただに学術資料としてばかりでなく一個の読物としても興味つきない好著であると信じるが、ときに納得しがたい語源説に遭遇する。例えば、(前略)《關伽(アカ)という仏教用語は「水」の意。》と速断したり、《次に仏教用語關伽(アカ)であるが、これは水を意味するボン語(中略) argha にあてはめた文字で、ラテン語で水

を aqua といい、英語で aquarium (水族館), aquatic (水の, 水産の, 水草, 水生動物) などという aqua と同源の語である。)云々と述べているが如きである。

繰返しいうまでもなく argha は本来の水を意味する梵語ではない、すでに独断乃至早とちりを踏まえての語源談義である。正面切って反駁するに値しない、いわゆる語源俗解の好例であろう。

ただ《ラテン語で水を aqua といい、(下略)》云々だけについていえば、元来英語には water という生活に密着した本来のことばが存在している上に、大方のヨーロッパの諸国語でも行われているように学術用語や関連合成語に、従来から共通の学術用語と認められ来たラテン語から aqua- を借用し、併用し来たまでのことである。かかる言語史の事情をば全く考慮にいれないで、にわかになラテン語 aqua と同源云々にまで飛躍することは見のがし難い語源俗解である。

またラテン語 aqua に触れるならば、同じく水を意味するギリシア語 hydōr 起源の接頭辞, hydr ; hydro にも言及しなければ片手落ちというべきであろう。一見相似性に欠けるようではあるが、これこそまさしく梵語の水, uda ; udaka と同源であり、これに反しよく似た語形はしているが、ラテン語 aqua と梵語 argha とはあくまで無関係である。

これを要するに、一見似通った両語を、言語史的解明を経ないで無頓着に結びつけようとするところに、通俗語源説の根本的体質がある。

文 献

1. 角川外来語辞典 (荒川惣兵衛著/バリカン).
増補外来語辞典 (榎垣実編/バリカン).
2. 成美堂現代英語学辞典 (Folk-etymology).
3. Klein's Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language (belfry).
4. Back-formation (逆成語) について (中島利夫/滋賀県立短期大学学術雑誌第 6 号).
5. 岩波古語辞典 (大野晋ほか 2 名編/ねこ).
6. 仏教大辞典 (望月信成著/あか 闍伽).

Summary

By folk-etymology is meant the casual explanation or popular etymology of the origin of words without foundation. After several examples of it are given in both foreign and Japanese words, special concern is paid by the author on the trace of the folk-etymology of the Japanese Buddhistic loan word, aka.